

研究ノート

.....

Domus animae meae

— Confeffiones I, 1, 5 —

加藤 武

幻想はいかにして生起するか。アウグスチヌスにおいてこれをさぐるものが、ここでの主題である。⁽¹⁾ そのために、『告白』の冒頭の 1, 1, 5 にみられる domus animae meae の一句をめぐって考察する。

*

幻想は虚無の大海に浮ぶ天の虹である。およそ虚無が口を開いていないところに幻想は成立しない。ニュートンの等質空間の閉ざされた系の内側に幻想的空間は成立することができない。それは系をつきやぶり噴出する。それは開かれた系である。

しかし幻想はしばしば人を誘い人を惑わす。幻想がまさに虚無の海に懸る虹なるが故に。

アウグスチヌスはこの点のきびしい省察をおこたっていない。マニ教のテキストがいかに華やかなあだ花に満ちているかは、多年にわたる苦い経験が教えるところであった。⁽²⁾

けれども、それにもかかわらず、われわれはアウグスチヌスの思索が色彩と音色において豊かであることにおどろく。かれの思索を彩るかのイメージは、単に修辞学的な用意にとどまるのであろうか。それとも、思索それ自身が要請するのであろうか。この点を考えてみよう。それは『告白』冒頭の文脈の進行を吟味することによってなされるであらう。畢竟、思想と文体の交叉する境位が考察の対象となる。

*

『告白』の冒頭を読んでいると、アウグスチヌスのイマージュに一つの注目すべき特徴がみられることに気付く。それは、イマージュが存在論的思維と結びついているということであり、以下に指摘する視点の転換の彼方においてあらわれるということである。ここではイマージュは決して Bergson においてみられるような、メタフォルにつきるものではない。むしろ意外なほどに、アウグスチヌスの思索ははじめからイマージュにうったえるものではなく、きびしい抽象の原野をどこまでも進む。しかし存在論的思索を軸として、地平が旋回し、視座が逆転せしめられる瞬間、それは「像」として現象し、結晶する。もとより注意深くみるならばなにげない動詞が、接頭語を備え、名詞が前置詞によって、方向付けられる。その意味で、かくれた、あるいは、みえがくれする岩を手掛りとして、思索波の行方を追跡することができる。

アウグスチヌスの思索波にたいたいつつ、行手に突如「像」が現出するとき、それはほとんど啓示にひとしい。

*

最近 Wien の Schmidt・Dengler は『告白』第Ⅹ巻の *aula memoriae meae* の一句をめぐって、精細な文献学的研究を発表した。⁽³⁾ (Wendelin Schmidt Dengler: Die «*aula memoriae*» ini den Konfessionen, des heiligen Augustin, p.69-p.89, Revue des Etudes Augustiniennes, XIV, 1 2, 1968, Paris) この研究はとくに資料的背景をローマの修辭学に求め、興味深い示唆に富むが、かれみずからみとめているように、そのイマージュがいかに現象するかについてふれていない。かれも指摘するように、『告白』冒頭の *domus animae meae* は『告白』第十巻の *aula memoriae meae* の伏線である。従ってこの一句の行方を追って、『告白』全巻の構造を精査しなくてはならないが、ここでの小論は、そのためのささやかないとぐちにすぎない。

2

(1) 「主よ、汝はおおいなる方にして、ま “Magnus es, Domine, et laudabilis

ことにたたらべきかな。汝のみ力は
にして、汝の智慧は計りがたい。」
valde, magna virtus tua, et sapientiae
tuae non est numerus.” Conf. I,1,1.

i) 「主よ、……」ここで主とは単に漠然と神をさしていわれるのであろうか。そうではない。それはきわめて注意深く限定される。すなわち『詩篇講解』によれば、

「大いにしてまことにたたらべき主と
はイエス・キリストを他ににして、た
れのことであろうか。」
“quis Dominus, nisi Jesus christus,
magnus et laudabilis nimis?” Enarr.
in Psalmum. XCV. 4, 4.

この豪壮なる最初の旋律の中に、すでに、やがて「魂の家」を訪れる花婿の姿がひそかに備えられていることを見通してはならない。

ii) 「大いなる方……」いかなる意味において大いなる、といわれるのか。同じく『詩篇講解』でみずから抽するところによれば、

君はたしかにかれが人として現われた
もうたことを知っている。君はかれが
女の胎に孕まれたことを知っている。
君はかれがその胎より生れたまいしこ
とを知っている。乳で養われしことを
知っていおり、手にていだかれ、十字
架にかかりたまひしことを知っている。
……汝は大いなる方にいまし、ま
ことにたたらべきかな。小さきものを
あざけてはならない。大いなるもの
とは何かを領得せよ。」
“Nostis certe quia homo ap-
paruit; nostis certe quia in utero
feminae conceptus est, nostis
quia ex utero natus est, nostis
quia lactatus est, quia manibus
portatus est, quia circumcisus
est,…… Magnus est et laud-
abilis nimis. Nolite contemnere
parvum, intelligite magnum,”
Enarr. in Psalm. XCV, 4, 4.

すなわちこの冒頭にひびく偉大さとは、十字架にきわまる卑小性、微小性に他ならない。人はここに逆説を読まねばならない。バスカルは無限なる蒼穹を前にして自己の微小なるにおどろきおののいた。

“Que l’homme contemple donc la nature entière dans sa haute et pleine majesté,…….Editions du Luxembourg, Paris, 1952.

しかしそこでは真に大いなるものはかくされている。が、ここでは逆説的に大

いなるものの前に、人は立っている。

汝の被造界の極微のたる小景、しかも死への傾斜をその身にいわば刻みこまれた人、傲慢なるものを汝がくだきたもう印を身に帯びている人間。

「魂の家」というイマージュはまだかくれている。しかし先取していえば、このような homoこそ、魂の家に他ならない。家とは、容器としての空間的表現であるが、そのような魂の場所にキリストが訪れるのである。

- (2) 「汝をたたえることを人がよろこぶようにと汝みずから促したもう。なぜなら、われらを汝に向けてつくりたまい、汝のうちにやすらうまでは、われらのこころはやすらうことがないのだから。」
- “Tu excitas, ut laudare te delectet; quia fecisti nos ad te et inquietum est cor nostrum, donec requiescat in te.” Conf. I, 1, 1.

iii) ad te; in te; inquietum; requiescat: ここに、前置詞と接頭語が登場する。それはアウグスチヌスの思索波を促進するスクリューであり、帆である。この有名な句が、『告白』第Ⅱ巻、第4節で語られる詩篇第4篇を背景とするということは充分考えられるが、それは単に眠りをさすににとどまらず、キリストの胸にいこうまでは安きを得ぬ花嫁の不安を暗示するのではないか。

それは露わな神秘的表現ではないが、動詞がすでにこのような方向を指示する語に導かれつつ、「魂の家」において鮮かになるイマージュを用意していると思われる。

- (3) 「汝を喚びまつると、汝をたたえまつると、いずれが先なるか、又、汝をたたえまつると、汝を知りまつるといずれが先なるか、主よ、ねがわくは知らしめたまえ。」
- “Da mihi, Domine, scire et intelligere, utrum sit prius invocare te, an laudare te et scire te prius sit, an invocare te.” Conf. I, 1, 1.

ここから、アウグスチヌスの弁証法的、乃至は対話的思索が始まる。この論法の中には循環がある。しかも循環しつつ上昇する。この鋭い螺旋状の思索に導かれて、ある種の逆転が生じる。イマージュはその逆転の彼方に生起する。

「だが、汝を知らぬとしたら、たれが “sed quis te invocat, nesciens

汝を喚びまつることがあろう。……それとも、汝が知られんがために、喚ばれるのであろうか。」

te? …… An potius invocaris, ut sciaris?" Conf. I, 1, 1.

ここで、受動態に移行してゆく事態に着目しなくてはならない。視点が、此方から彼方へと移っている。見るものから見られるものへの転換がある。この転換によってイメージが喚起される。

(4) 「だがわたくしのうちにそこを通して神がわたくしのうちへ来りたもうようないかなる処があるのだらうか。」

"et quis locus est in me quo veniat in me Deus meus?" Conf. I, 1, 2.

処, locus。人はいかも知れない。ここには若き日になずんだマニ教的な空間的思惟の面影が映っていると。⁽¹¹⁾しかし人はここに、かゝる空間がつき破られてゆく姿をみなくてはならない。空間より処へ⁽¹²⁾。そこには変貌がある。

処とはそこに赴いて几に憩う義であるが、魂の家とはそのような住家である。

「主、わが神よ、わがうちに汝を容れまつるような何かがあるのであろうか。それとも汝がつくり給い、その内にわたくしをつくり給うたあの天と地が汝を含むのであろうか。それとも汝なしに、あるものはあらぬのであるから、何かあるものが、汝を包むということになるのであろうか。」

"Itane, Domine Deus meus, est quidquam in me quod capiat te? an uero coelum et terra quae fecisti et in quibus me fecisti, capiunt te? An quia sine te non esset quidquid est, fit ut quidquid est capiat te?" Conf. I, 1, 2.

汝が存在するのでなければいかなるものも存在しないという存在への着目がここにあらわれる。

つづいていう。

「だが、わたくしは存在するのであるから、汝がわたくしのうちに存在するのでなければ存在することのないわたくしのうちへと汝が来り給うために、何を求めればよいのか。」

"Quoniam itaque et ego sum, quid peto, ut venias in me, qui non essem, nisi esses in me?" Conf. I, 1, 2.

わたくしが存在する (ego sum) という何人も疑うことのできない事実を手掛りとして思索はすすめられる。

「されば、わが神よ、汝がわがうちに存在するのでなければ、わたくしは存在せぬであらうし、否、全くないであらう。それとも、わたくしが汝のうちに存在するのでないなら、わたしは存在しないのであらうか。」

“Non ergo essem, Deus meus non omnino essem, nisi esses in me. An potius non essem, nisi essem in te, ……?” Conf. 1, 1, 2.

nisi esses in me から nisi essem in te へと、視線がこちらから向う側へと、転回していることに注意しなくてはならない。

わがうちにと来り給う汝は、「われは天と地とを満たさん。」(“coelum et terram ego impleo.” Conf. 1,1,2.)といわれたのである、このことばは、エレミヤ記 23 章 24 節からとられた。その前後を写してみると、

「主は言われる。わたしはただ近くの神であって遠くの神ではないのであるか。主は言われる。人はひそかな所に身を隠してわたしに見られないうりにすることができようか。主は言われる。わたしは天と地に満ちているのではないか。」 23, 23-25.

神が天と地を満たすとは、このように、神が近くにあって、神のまなざしの下におかれるというにひとしい。このことは、アウグスチヌスが立っている地平線についてもあてはまる。

(5) impleo という動詞から vasa, 器のイメージが浮ぶ。器に満々と水が溢へられ、やがて溢れ、ゆらめき、きらめいて雫が降る。それはくだかれても、こぼれ散ることがない。

“summe,
optime,
potentissime,
omnipotentissime,
misericordissime et iustissime, ……” Conf. 1, 1, 4.

ちょうど盃に溢れる酒が一滴、一滴、グラスをつたっておりてゆくように形容

詞も、すこしずつ長くなり、ついに二語に割れ、やがて分詞に変る。[m] [p] [t] [s] [r] ……音韻の美しさも意味の味わいを増大する。

新羅夜半日頭明，言語道断の美がここにある。

滴，一滴したたる雫のかすかな音にしばし耳を傾けて我を忘れた。だが一瞬，沈黙が来って我にかえる。

「誰が，汝のうちにいこうことを得しめたものか。」 “Quis mihi dabit adquiescere in te?” Conf. I, 1, 5.

adquiescere は，冒頭の *requiescere* を受けている。

「汝がわが心に来て，我を忘れしめ，わが悪を忘却し，わが唯一の善なる汝をかきいただくことを得しめ給うのは誰か。」 “quis dabit mihi, ut uenias in cor meum et inebries illud, ut obliviscor mala mea et unum bonum meum amplectar, te?” Conf. I, 1, 5.

inebries, obliviscar, amplectar が神秘的香気に溢れていることは注目すべきであり，花嫁のもとに来る花婿の比喩であることは明らかである。

*

アウグスチヌスはいう。

「語り給え，汝のあわれみによりて，わが神にいます主よ，汝はわれにとりて何にてあり給うかを，わが魂に語り給え。『われは汝の救いなり』と。」 “dic mihi per miserationes tuas, Domine Deus meus, quid sis mihi? Dic animae meae; Salus tua ego sum” Conf. I. 1. 5.

つづいていう。

「かかるみ声のあとを追わんものを，汝をとらえまつらんものを。」 “Curram post vocem hanc et apprehendam te.” Conf. I, 1, 5.

ほとんどめしいの如くに，神の声のあとに追いつがらんとする。

ここで声が語られ，言葉が孕げられている点に注目しよう。

*

“Noli abscondere a me faciem tuam, moriar, ne moriar, ut eam

videam.” Conf. I, 1, 5

この箇所は問題がある。

(i) Wijdefeld は次のようにテキストを読みかえる。 *moriarne? moriar. ut eam videam.* その場合、リズムがそこなわれるのでわざわざこのように切るには及ばない。

(ii) Tréhorel (Solignac) は Skutella に従って上のテキストのままよむが、その意味は次のようにとる。“Non, ne me cache pas ta face, que je meure ou je ne meure pas, afin que je la voie.” 最近の田田晶氏の訳も、「死のうと死ぬまいと、それはどうでもよい。」とされている。

しかし次のように訳すことも可能である。

「汝のみ顔をわたくしからかくし給うことがないように。汝のみ顔をみまつるために、むしろ死なんものを。それは死ぬことがないためである。!

いずれにせよ、聖顔をみることへのはげしいあこがれが記されている。それは単にみる、ではない。ほとんどめしい、よろほいつつ、なお、死のきびしい断崖に立って手をさしのべるにひとしい。

*

われわれは、生のこなたにおいてあれをみ、これを見る。けれども、水平の視界においてじつはわれわれは何もみていない。明晰は、死にふれる一瞬訪れる。その一瞬に、わがまなざしに逆転が訪れる。水底深く溺れんとする瞬間、われわれは、空の美しさを、聖なる岸边を一挙にしてさとり。そのとき、ものたちははじめて、明るく澄んだほほえみをもってわれわれを取巻き輪舞する。

死のうと死ぬまいとではなく、死ぬのでなければならぬ。そのような断崖において、めしいの眼に、聖なる顔が映る。

*

「汝が来り給うためには、わが魂の家 “Angusta est domus animae
は狭い。汝によりて、ひろくされるこ meae, quo venias ad eam:

とを得しめ給え。」

dilatetur abs te.” Conf. I, 1, 5.

魂の家のイマージュはようやく結晶した。

それは狭いと言われる。ひろげ給えと語られる。ここでもなお、一種の物体の延長としての狭さがいわれているのであろうか。そうではない。ここで魂の修復が希求され、浄化が懇願されている。

これは、空間とよぶことができない。内的空間とよぶも、なお不充足である。それは、空間が破られて、そこにキリストの来る作家であり、憩うべき処である。

ここでいう狭さとは、空間的、量的な狭さのことでない。ちょうど、深さという言葉が井戸の深さも、心の深さも示すが、それは決して、井戸の深さの場合が原義で、比喩的に心に転義されたのでない (Minkowsky) のと同じように、angusta は空間の転義ではない。純粹直観の世界を語ろうとして、どうしても空間的比喩の助けをかりるのではない。

このような処へと自在の風が吹いてくる。そのとき、めし_いの魂の内奥に向って、ことばが語られるのである。

- (1) この小論は、Homeros, Vergilius, Augustinus, Dante を通して幻想の現象学を考えようとする意図のために、一つの象面よりなされた試みの一部である。拙論、『幻想の超越性、—— Vergilius, Bucolica I』立教大学研究報告、人文科学、第23号、1967年
- (2) とくに幻想の虚無性については、Augustinus とマニ教の関係が省みられねばならないが、他日の考察にゆずる。
- (3) ただ domus animae meae とか aula memoriae meae という語群の構成にみられる所有格がセム語的であることについての適切な指摘がモールマンによって行われていることを忘れてはならない。Christine Mohrmann: Etudes sur le latin des chrétiens, tome I, le latin des chrétiens. Roma, 1961. P.376 The confessions as a literary work of art
- (4) Alfred Adam: Sprache und Dogma, Der Manichäische Ursprung der Lehre von den zwei Reichen bei Augustin. S. 150, (35) Gütersloh, 1969. skinata,

atna と locus の連関は注目してよい。

- (5) Martin Heidegger : Die Kunst und der Raum, L'art et L'espace, St Gallen, 1969 における Raum と Ort の区別に教えられた。
- (6)(7) Desclée de Brouwer, 1962, Paris, p. P. 282—283, note 1
- (8) 『アウグスティヌス告白』世界の名著 14 , 1968 年, 東京, 64 頁